Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-12-31

日本語の取り立て助詞「まで」と韓国語の特殊助詞「kkaci」の対照研究

李, 埈瑞

(Citation)
国文学研究ノート,40:68-56

(Issue Date)
2006-01

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012369

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012369

日本語の取り立て助詞「まで」と韓国語の特殊助詞「kkaci」の対照研究

李　　埈　瑞

1　はじめに

日本語の取り立て助詞が果たす意味・機能を他言語の多くは文副詞類または「音声的な情報としての卓立」[1)]が果たすことを考えれば、韓国語の特殊助詞は日本語の取り立て助詞とかなり近い役割を担うものと考えてよかろう。そのなか、日本語の「まで」と韓国語の「kkaci」は、時・空間上における限界点または到達点を示す格助詞としての意味・機能を共有する。しかし、同じく格助詞から拡張したものと思われるそれぞれ言語の取り立て助詞・特殊助詞がお互いに異なった意味・機能を示すように見える。

以下、比較・対照の視座から、同じく格助詞として振舞う「まで」「kkaci」からそれぞれ生じる両言語の多義間の類似点や相違点を探る。

2　先行研究

日本語の場合、先行研究の多くは、取り立て助詞「まで」と格助詞「まで」の連続性を求めながら、「さえ」との比較・対照を通じて「序列性」に基づく理解を示す。その代表的な研究には沼田（1986）、寺村（1991）などがある。

「まで」：主張・断定・自者肯定
　　か　　つ
　　含み・予想・自者否定
　　他者肯定

「さえ１」：主張・断定・自者肯定
　　か　　つ
　　含み・予想・自者否定
　　他者肯定

沼田（1986）

「まで」がとりたてるのは命題を満たす可能性のある要素の集合内の最も中心から遠い要素であるのに対して、「さえ」がとりたてるのはその集合の外にある要素であり……［後略］

寺村（1991：117）

ここで、取り立て助詞の「まで」に対する沼田（1986）と寺村（1991）の間には、同じ文法現象を扱ったものとは思えないほど、大きな食い違いが見られる。寺村（1991）が「自者」を「命題を満たす可能性集合」の中に入れることで「肯定」するのに対して、沼田（1986）は「含み」として「自者」を「否定」するのである。

一方、日本語の取り立て助詞「まで」が「序列性」を基盤に「さえ」としばしば比較されることとは対照的に、韓国語の特殊助詞「kkaci」は一般に「添加」の意味・機能を表す「to」（「も」）と比較される。

{to}（も）と {kkaci}（まで）との部分的な類義関係においても、厳密に見るとその程度に差がある。'亦同' の意味に於いては {to}（も）が {kkaci}（まで）より強く、'極端提示' の意味に於いては {kkaci}（まで）が {to}（も）より強い。

又、上に例示した文を意味の真偽依存関係によって分析すると、相互差異がある。

(1) puin-{to} cikcangsenghwal-ul hanta.
　婦人　も　職場生活　　を　する。
　a．前提：婦人以外に他の人（夫）がいる。
　b．断言：婦人が職場生活をする。
　c．含意：婦人以外の人（夫）も職場生活をする。

(2) puin-{kkaci} cikcangsenghwal-ul hanta.
　婦人　まで　職場生活　　を　する。
　a．前提：婦人以外に他の人（夫）がいる。
　b．断言：婦人が職場生活をする。
　c．含意：①婦人以外の人（夫）も勿論職場生活をする。
　　②話し手は婦人が職場生活をすることを期待しない。

文(1)と(2)で、前提と断言の内容は同じであるのに、ただ含意内容が相互違う。又、含意に於いても、話し手の期待があるかどうかの差異しかない。

両方の文を解義すると、文(1)の {to}（も）はだれが職場生活をするかという事の上に婦人が添加されるというのであり、文(2)の {kkaci}（まで）は単なる添加ではなく、婦人が職場生活をするのが極端の例となるのを示している。

即ち、婦人は職場生活をしないのが当然又は一般的な事実であるのを暗示し、このような当然・一般的な認識を超えた事実が提示されることによって極端の意味が生ずると言える。

洪思満（1982:118-119）

ここで、韓国語の特殊助詞「kkaci」の示す「自者」が「当然・一般的な認識を超えた」もの、すなわち想定外・期待外のものであるとする認識は、寺村（1991）と対照的で、沼田（1986）と一脈相通するものである。

2　日本語の取り立て助詞「まで」の多義性に対する本稿の理解

従来、格助詞「まで」と連続的なものとして一緒に扱われてきた取り立て助詞「まで」の意味・機能を二分して考えることができる。

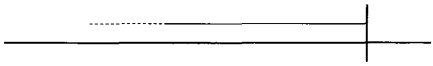
2.1 「限界提示」の「まで」

「限界提示」の「まで」は、時・空間上における限界を示す格助詞の「まで」と連続的に捉えられる。

(3)　デザートまで食べた。(安部2002)
(4)　骨まで丸ごと食べられる魚。
(5)　燃料まで軽量化。
(6)　ホームページの製作から宣伝までトータルプロディース。
(7)　あゆみは、毎日子供のパンツにまでアイロンをかける。(中西1995)

(3)〜(7)は、寺村（1991）のいう「時間・空間の延長線上の限界ということを擬制的に表す語法」(p117) であり、常識的に考えられる或る序列のなかで想定他者と自者が序列関係を成している。その序列関係を視覚化して示すと次のようになる。

(3)'「食べた」ことが考えられるもの：



前菜　……　メイン料理　……　デザート

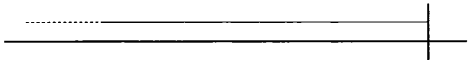
(4)'「食べられる」と考えられるもの：

身　……　目玉　……　骨

(5)'「軽量化」することが考えられるもの：

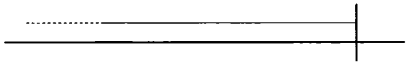
車体　……　エンジン　……　燃料

(6)'「プロディースする」ことが考えられるもの：



ホームページの製作 …… 管理・運営 …… 宣伝

(7)'「アイロンをかける」ことが考えられるもの：



ズボン …… ワイシャツ …… パンツ

このような序列関係は、格助詞「まで」の表す時・空間上における序列関係と同様に、表現時以前に意識されるものであり、これらの「まで」が格助詞の「まで」と連続的に理解できるがゆえに、それぞれの文において限界の到達点と対比される起点を「から」によって言語化することができると考える。

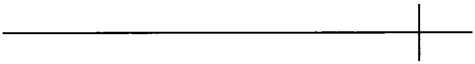
(8) *前菜から*デザートまで食べた。
(9) *身から*骨まで丸ごと食べられる魚。
(10) *車体から*燃料まで軽量化。
(11) *ホームページの製作から*宣伝までトータルプロディース。
(12) あゆみは、毎日*ズボンから*子供のパンツにまでアイロンをかける。

格助詞「まで」の示す到達点・限界点に対する起点が類推できることと同様に、(3)〜(7)における「まで」の示す到達点・限界点に対する起点が常識的に類推できるのである。

ここで、格助詞「まで」と取り立て助詞「まで」との連続性は次のように捉えることができるのである。

＜図１＞

xまで（格助詞）P



xがP

x　時間・空間

xまで（取り立て詞）P

xがP

x　EXPECT 値[2)]

このように、「限界提示」の「まで」は「時間・空間」といった具体的な領域における「限界」を示す格助詞から、抽象的な領域における「限界」を示す取り立て助詞に拡張したものと考えることができる。本来「時間・空間」における「限界」を示す「まで」が、心的空間における心理的な「限界」を示すのに用いられるものと考える。「限界提示」の取り立て助詞「まで」は格助詞の「まで」からメタファーに基づいて拡張されたものとして連続的に捉えることができるのである。

2.2 「添加」の「まで」

「限界提示」の取り立て助詞「まで」が格助詞「まで」と連続的に理解できるのに対して、格助詞の「まで」と連続的なものであるとは考えにくい用例が多数見られる。

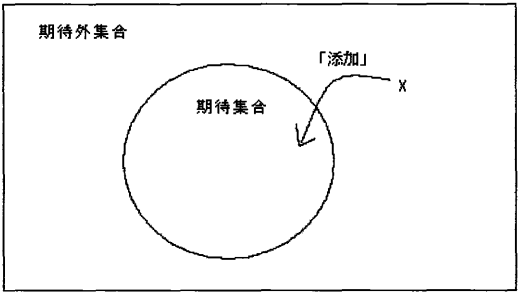
(13) ご飯まで食べた。(安部2002)
(14) ホームランまで見せてくれました。(清原の2000安打記録達成試合のヒーローインタビュー)
(15) USBメモリ型MP3プレーヤにカードリーダまで付いた！
(携帯音楽プレーヤの宣伝文句)
(16) 今日は登りだけで一番きつい日である。おまけに雨まで降り出し、どんどんひどくなっていく。(荒川三山登山記)
(17) 今回は特別にビデオデッキまで付けまして。。。(テレビショッピング)
(18) 衣類は勿論、旅費まで恵んで呉れた。(時枝1950)

(13)〜(18)は、自者と他者との関係、また、他者のありようにおいて、具体的にどのような他者がどのような序列関係にあるのか問題とならない。

李（2005）ではこれらの「まで」の意味・機能を「添加」として次のように示した。

＜図2＞

<u>XまでP</u>



ここで、「まで」の示す「自者」は、期待他者集合と異なった領域、すなわち期待外集合のものであるため、「自者」と「他者」との間の序列関係を問うことは無意味である。「自者」は期待集合内（<図2>の円のなか）の「他者」と異なった領域（期待外集合）に属したもので、期待・予想範囲を飛び越えたものである。そのなか、期待外要素の期待集合への領域間の移動が「添加」の「まで」の主な使用目的である。

「限界提示」の取り立て助詞「まで」は他者が位置する序列軸の延長線上にある自者を示すため、自者と他者の間または他者同士間の上下序列関係が自然に問題とされる。しかし、「添加」の「まで」の示す自者は序列関係を飛び越えた異領域のものであるため、自者と他者の間の上下序列関係はもちろん、他者同士間の序列関係さえも意味を成し得なくなってしまう。結局、序列性が無視された単純な「自者集合 vs 他者集合」という二分対立構造となってしまい、自者の他者集合への領域間移動（期待外集合から期待内集合へ）が「添加」として現れるものと考える。

取り立て助詞「まで」に対する沼田（1986）と寺村（1991）の間の見解の大きい食い違いは、沼田（1986）が「添加」の「まで」に、寺村（1991）が「限界提示」の「まで」に、それぞれ違った側面に注目したことによるものと考えられる。

3　韓国語の「kkaci」

韓国語の特殊助詞「kkaci」と格助詞「kkaci」の間の連続性は、日本語の場合と違って、極めて見えにくい。韓国語の特殊助詞「kkaci」は時・空間上の限界点を示す格助詞の「kkaci」とは異なった意味・機能を果たすものと考えざるを得ない。

(19)　부인**까지** 직장생활을 한다.
puin-**kkaci** cikcangsenghwal-ul hanta.
婦人　まで　職場生活　を　する。
a．前提[3]：婦人以外に他の人（夫）がいる。
b．断定：婦人が職場生活をする。
c．含意[4]：①婦人以外の人（夫）も勿論職場生活をする。
②話し手は婦人が職場生活をすることを期待しない。

(20)　20대 초반의 필자는 무절제한 생활에 도박중독증세**까지** 있었다.
20tay copan-uy pilca-nun mwucelceyhan saynghwal-ey
20代　初半の　筆者は　無節制な　生活に
topakcwungtokcungsey-**kkaci** iss-essta.
賭博中毒症状　まで　あった
（아침형 인간）
a．前提：賭博中毒症状以外に他がある。

b．断定：賭博中毒症状があった。

c．含意：①賭博中毒症状以外のものも勿論あった。

②話し手は賭博中毒症があることを期待しない。

(21) 당사자도 아닌 나 자신**까지** 공연히 화가 치밀어오는 지경이다.

tangsaca-to anin na casin-**kkaci** kongyenhi hwa-ka chimileolun cikyengita.

当事者でも ない 私 自身 **まで** 公然に 怒 が 湧き上がる 状況であった

(내일은 오늘과 달라야 한다)

a．前提：私自身以外に他の人がいる。

b．断定：私自身が怒る。

c．含意：①私自身以外の人（当事者）も勿論怒る。

②話し手は自分自身が怒ることを期待しない。

(22) 이는 마치 흉년 배고픔에 못 견뎌 내년 농사에 쓸 씨감자**까지** 꺼내 먹어버리는 것과 같은 어리석은 짓이다.

i-nun maci hyungnyen paykopwum-e mos kyentye naynyen nongsa-e ssul

これは まるで 凶年 空腹 耐えられなくて 来年 農作に 使う

ssikamca-**kkaci** kkenay mekepelinun kes-kwa katun elisekun cis-ita.

種 **まで** 出して 食べてしまう ことの ような 愚かさ である

(아침형 인간)

a．前提：種以外に他のものがある。

b．断定：種を食べる。

c．含意：①種以外のものも勿論食べる。

②話し手は種を食べることを期待しない。

（※以上の韓国語の意味分析は洪（1982）に倣ったものである。）

以上の用例が示してくれるように、韓国語の特殊助詞「kkaci」の示す自者は常に想定外・期待外のものであり、その基本的な意味・機能は一般に「to」（「も」）の「添加」とされる。また、「pwuthe」または「ese」[5]（日本語の「から」）による起点の言語化が不可能であり、序列関係の想定が行われないのである。

(23) *남편{부터, 에서} 부인**까지** 직장생활을 한다.

*namphyen-{pwuthe, ese} puin-**kkaci** cikcangsenghwal-ul hanta.

主人 から 婦人 **まで** 職場生活 を する。

⑲～㉒の「kkaci」がある起点と対比される到達点を表すものであるとは考えられず、自者と他者との関係、また他者のありようにおいて具体的にどのような他者がどのような序列関係にあるかは問題とならない。

韓国語の特殊助詞「kkaci」は日本語の「添加」の「まで」とほぼ同様な意味・機能を果たし、日本語の取り立て助詞「まで」の表わすような心的空間における「限界提示」の意味・機能を持たないため、格助詞「kkaci」との連続性は示せないのである。

4　日本語の取り立て助詞「まで」と韓国語の特殊助詞「kkaci」の比較・対照

4.1　「意外性」の意味度合いの差

格助詞の「まで」から拡張した日本語の「限界提示」の取り立て助詞「まで」が、表現時以前にすでに定められた、或る序列上における「限界」を示すものであるとすれば、韓国語の特殊助詞「kkaci」は想定外・期待外の要素の想定内・期待内への移動、すなわち「添加」の意味・機能のみを表わすものである。このような両言語間の意味・機能の差は含みとして生じる「意外性」の意味度合いの強弱の差と深く関る。

「限界提示」の取り立て助詞「まで」の「意外性」の生起は文脈依存度が高く、次のように取り消し可能である。

㉔　当然のことながら、デザートまで食べた。
㉕　当然のことながら、骨まで丸ごと食べられる魚。
㉖　当然のことながら、燃料まで軽量化。
㉗　当然のことながら、ホームページの製作から宣伝までトータルプロディース。
㉘　当然のことながら、あゆみは、毎日子供のパンツにまでアイロンをかける。

これに対して、韓国語の特殊助詞「kkaci」の「意外性」は取り消すことができず、常に感じられる強烈なものである。

㉙　* 당사자도 아닌, *당연히* 나 자신까지 공연히 화가 치밀어오는 지경이다.
　　* tangsaca-to anin *tangyenhi* casin-**kkaci** kongyenhi hwa-ka
　　当事者でもない　当然のことながら私自身**まで**　公然に　怒　が
　　chimileolun cikyengita.
　　湧き上がる　状況であった

(내일은 오늘과 달라야 한다)

(30) *이는 마치 흉년 배고픔에 못 견뎌, *당연히* 내년 농사에 쓸 씨감자까지 꺼내 먹어버리는 것과 같은 어리석은 짓이다.

*i-nun maci hyungnyen paykopwum-e mos kyentye *tangyenhi* naynyen
これは まるで 凶年 空腹に 耐えられなくて 当然のことながら 来年
nongsa-e ssul ssikamca-**kkaci** kkenay mekepelinun kes-kwa katun
農作に 使う 種 まで 出して 食べてしまう ことの ような
elisekun cis-ita.
愚かさ である

(아침형 인간)

(31) *몇년이 지나자 예전에는 도저히*당연히* 상상도 할 수 없었던 일까지 벌어졌다.

*myech nyen-i cinaca yecen-e-nun tocehi *tangyenhi* sangsang-to hal
何年が 過ぎる 以前には 到底 当然のことながら 想像も できない
su epsessten
il-**kkci** pelecyessta.
こと**まで** 起きた

(내일은 오늘과 달라야 한다)

(32) *자칫 잘못하면 *당연히* 핵전쟁까지 수반하는 제2의 유고슬라비아가 될지도 모를 지구촌의 신흥화약고가 됐다.

*cachis calmosha-myen *tangyenhi* haykcencayng-**kkaci** swupanh
一歩間違ったら 当然のことながら 核戦争 **まで** 随伴する
anun cey2-uy yukosullapia-ka toylcito molul cikwuchon-uy sinhung
第2の ユーゴスラビアに なるかも知れない 地球村の 新興
hwayakko-ka twayssta.
火薬庫 に なった。

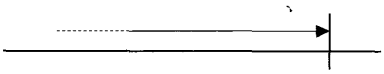
(세계를 움직이는 127대 파워)

4.2 推論の到達点を示す取り立て助詞「まで」と推論の出発点を示す特殊助詞「kkaci」

格助詞から拡張した日本語の取り立て助詞「まで」は、表現時以前にすでに想定される序列関係のなか、起点・出発点と対比される到達点を示す。

(33) デザートまで食べた。(安部2002)

(33)'「食べた」ことが考えられるもの：



前菜 …… メイン料理 …… デザート

（※矢印の向きは推論の方向を表わす）

ここで、同序列軸に位置する他者の存在を否定することはできない。

(34)*（前菜から）デザートまで食べたのだが、前菜は食べなかった。

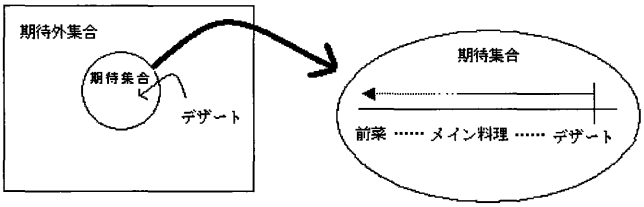
「まで」の示す自者「デザート」は、「食べたことが考えられるもの」のなか、最後の要素（到達点）であり、他の食べ物の存在が前提となって成り立つものである。

これに対して韓国語の特殊助詞「kkaci」は、「pwuthe」または「ese」（「から」）による起点・出発点の言語化ができず、日本語の取り立て助詞「まで」から想定できるような序列関係は普通想定できない。

ところが、韓国語の特殊助詞「kkaci」の示す自者が、語用論的な世界において、推論を促進する材料となる場合がある。すなわち、期待外集合の要素が「kkaci」によって期待内集合に移動された後、事後的に＜図３＞のような序列関係の想定が引き起こされる場合がある。

(35) 디저트**까지** 먹었다.
ticethu-**kkaci** mek-essta.
デザート**まで** 食べた

＜図３＞



（※矢印の向きは推論の方向を表わす）

＜図３＞の序列関係は推論の方向が日本語の取り立て助詞「まで」の場合と逆である。日本語の「まで」が「から」の示す起点と対比される到達点を示すのに対して、韓国語の特殊助詞「kkaci」は「自者」自身が推論の起点（出発点）となると考える。「kkaci」の

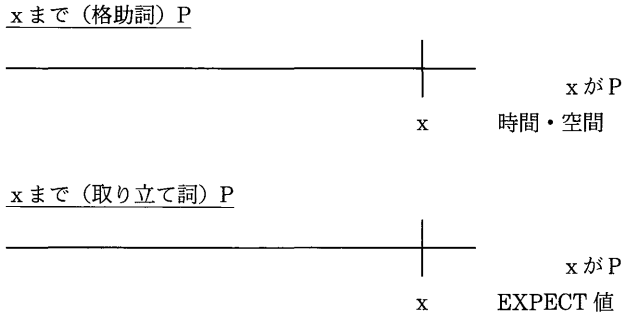
示す「自者」が推論の出発点となって生じる序列軸上の他者の存在が次の㊱のように取り消し可能であることから、「kkaci」の引き起こす序列関係は語用論的に作られる推論の結果であると考えるのである。

㊱ 디저트**까지** 먹었지만, 전채요리는 먹지 않았다.
ticethu-**kkaci** mek-ess-ciman, cenchayyoli-nun mekci anh-assta.
デザート**まで** 食べたのだが 前菜料理は 食べなかった

5 まとめ

互いに格助詞としての意味・機能を共通している「まで」「kkaci」から拡張したものと思われる取り立て助詞「まで」、特殊助詞「kkaci」の意味・機能の相違点や類似点を論じた。

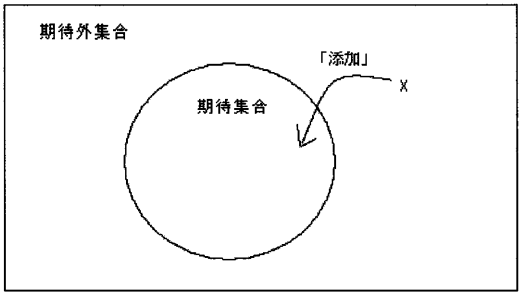
日本語の場合、格助詞「まで」と取り立て助詞「まで」は次のような連続性を示す。



取り立て助詞「まで」は「時間・空間」といった具体的な領域における「限界」を示す格助詞から、抽象的な領域における「限界」を示す取り立て助詞に拡張したものと考えることができる。本来「時間・空間」における「限界」を示す「まで」が、心的空間における心理的な「限界」を示すのに用いられるものと考える。「限界提示」の取り立て助詞「まで」は格助詞の「まで」からメタファーに基づいて拡張されたものとして連続的に捉えることができるのである。

一方、韓国語の格助詞「kkaci」と特殊助詞「kkaci」の間の連続性は極めて見えにくく、その意味・機能は「to」（「も」）の「添加」である。

X「kkaci」P



ここで、「kkaci」の示す「自者」は、期待他者集合と異なった領域、すなわち期待外集合のものであるため、「自者」と「他者」との間の序列関係を問うことは無意味である。「自者」は期待集合内の「他者」と異なった領域（期待外集合）に属したもので、期待・予想範囲を完全に飛び越えたものである。そのなか、期待外要素の期待集合への領域間の移動が「添加」の「kkaci」の主な使用目的である。

注

1）沼田（2000：153）を借りる。

2）格助詞「まで」の働く時間・空間に対する取り立て助詞「まで」の働く心的空間は次の山中（1991）を援用する。

「「EXPECT 値」とは、話し手が、表現時以前の聞き手との共通知識から、提示した要素が、命題関数を満たすことに関して、期待・予測する主観的な評価の度合である。話し手は、聞き手も同様のE値をもつと仮定する。」山中（p26）

3）4）これらが presupposition であるのか、conventional implicature であるのか、conversational implicature であるのかといった議論にはここでは深く立ち入らず、一般的に言われる意味での「前提」「含意」として使用する。

5）時間の場合「pwuthe」、場所の場合「ese」

引用文献

安部朋世（2002）「「とりたて」のマデの意味分析」『鶴見大学紀要（国語・国文学）』39
坂原茂（1986）「“さえ”の語用論的考察」『金沢大学教養部論集人文科学編』23-2
寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
丹羽哲也（1995）「「さえ」「でも」「だって」について」『人文研究（大阪市立大学文学部紀要）』47
沼田善子（1986）「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社

沼田善子（2000）「第3章とりたて」『時・否定と取り立て』岩波書店
山中美恵子（1991）「「も」「でも」「さえ」の含意について」『日本語と中国語の対照研究』14
李埈瑞（2005）「取り立て詞の「まで」」『国文学研究ノート』39（神戸大学文学部研究ノートの会）
洪思満（1982）「한국어의 특수조사와 일본어의 부조사와의 대조연구 (3) - ' 극단예시 ' 어류의 의미분석을 중심으로 -」, 언어과학회

【韓国語の例文出典】

세계를 움직이는 127대 파워（박태견）
생각의 기술（김재은）
내일은 오늘과 달라야 한다（조안 리）
아침형 인간(인생을 두 배로 사는)（사이쇼 히로시）

（り　じゅんそ／本学大学院生博士課程）